

地域活性化プロジェクト

第2弾 北海道洞爺湖サミット

春の盛りを迎えた東京から一時間三十分。南千歳空港から特急北斗8号に乗って洞爺湖町を目指す。4月上旬の北海道は、冬の衣の裾からやっと芽を出したふきのとうが、ちらほらと地面に顔を出していた。

北海道洞爺湖町



G8 HOKKAIDO TOYAKO SUMMIT

海と山と湖、 そして生きる山・有珠山

洞爺駅で降りると、駅からまっすぐに伸びる道がある。耳を澄ますと波の音が聞こえる。風によって潮の香りも運ばれてくる。奥のほうに、波のはなが見える。

北海道の中でも温暖な気候で知られる「洞爺湖町」は、二〇〇六年三月二十七日に噴火湾と洞爺湖に面する虻田町そして湖に面する洞爺村の二町村の合併により誕生した。平成の市町村大合併のうち道内では最も小さい面積の合併

だった。

「合併によって、得るものは大きかったんですよ」洞爺湖町長の長崎良夫さんは語る。

「もともと、洞爺湖の側で暮らしているという共通認識があったから、合併することに問題はなかったんです。私たちの町は海からの恵みである海産物と山からの恵みである農産物、そして火山からの恵みである良質な温泉を手に入れたんです。海から湖までたったの四キロ。その中間には有珠山。優れた地勢と景勝地がある。こんな自然に恵ま

れた場所はそうそうないでしょう」

午後のやわらかい日差しが入る応接室から見える穏やかな海には何隻も船が並んでいる。いまの季節の洞爺湖町はちょうどホタテの養殖業のピークだ。

「去年、噴火でダメになった国道二三〇号線の復旧作業が終わったんです。国や道も協力してくれて、七年かかってやっと完了した。ここ三〇年間の間に二度も大きな噴火があったでしょう。有珠山はね、二〇年〜三〇年に一度噴火す

る生きた山なんですよ」

噴火、 そしてその後

二〇〇〇年三月三十一日、午後一時十分頃、二二年七か月ぶりに有珠山が爆発した。町には火山灰が積もり、余震の影響で地面はひび割れ、あたり一帯に硫黄の匂いが立ち込めた。美しかった洞爺湖には熱泥流が流れ込む。海側の虻田町ではホタテ貝の養殖作業にとりかかれず、たくさんの人が一時的に仕事を失った。「本当に、噴火で打ちのめさ

れた気持ちになったと思います。犠牲者は出なかったものの、町民の九七%が他の町や市に避難した。避難から戻って、みんなで復旧に力を注いで、やっと国道の復旧作業が完了した時期に、この町でサミットが開催されることが決まった。これはここに暮らすみんなにとっても意義のある出来事でした。でもね、ほらこの辺りの人はちよっと照れ屋でおとなしいところがあふれるでしょう。復興作業の途中であって、自分たちの生活も含め、これからどんな状況



洞爺湖町

北海道虻田郡にある町。2006年3月27日、虻田郡虻田町と洞爺村が新設合併して設置された町である。



になるのか想像できない中だったから、戸惑いと歓迎の両方のムードがありましたよ」

再発見した洞爺湖町の魅力

「戸惑っていた理由の一つは、自分たちの町の良さがわからなかったことでしょう。この海も湖も、温暖な気候もはっきりとした季節も、湧き出る温泉も山の恵みも、ここに住む人にとっては当たり前のことだから。あまりにも身近にあったからね。『どうして洞爺湖町がサミット会場に？』って不思議に思ったんです。『さあね』」

サミットの開催地が洞爺湖町に決まった理由をたずねると、「ちょうど、サミットに必要なものが何でも揃っている状況だったんだと思います。今回は、地球温暖化がメインテーマということで、自然と人がうまい具合に共生しているイメージ通りの町だったんです。しかし、サミットを迎える苦労も大きい。サミット開催中の七月七日〜九日はこちらの前後の期間、洞爺湖町は厳重な警備体制に入る。」

「警備に関してはね、難しいこともあります。やっぱり、噴火のときは大変でしたから。本来なら十分で着くはずの道のりを延々と迂回して、その迂回路も混んでいて、なかなか目的地に到着できないのではないかとというフラストレーションを感じている人も確かにいます。この町は、私たちにとっては生活していく場なので日々の営みに支障が出てしまうことには抵抗があるんです。『さあね』」

真心でもてなす

「世界各国から訪問者がやってくる、ということも不安材料の一つでした。観光の街といえ日本や近くのアジアの国々からのお客様がほとんど。世界的な行事の開催はもちろん初めてだから、どうやって迎えたら喜んでもらえるんだろう、という気持ちだったんです。」

町民の不安を受け止めるために、長崎さんは何度も町民との語らいの場を設けた。「一つひとつ、不安な点を解消してサミットに参加できる気持ちと体制を作っていたんです。今回のサミットは

『コンパクトなサミット』というところから、それを派手な歓迎はやめようとか、開催国全ての『こんにちは』を覚えようとか、笑顔を絶やさないことにしようといった感じですね。真心で諸外国をもてなそう、ということに決まったんです」

「サミット通信」という町の発行物を通して、サミットを全員で成功させるという意識づくりをしている。

三月二五日には全国から『環境かべ新聞コンテスト』の入賞者や、町の小学生たちが参加する『子ども環境サミット』も開催された。

「テレビや新聞で自分たちの町が紹介されたり、環境のことを学ぼううちに、自分たちの住むこの場所の素晴らしさを再発見したんです。噴火の傷跡が全部なくなったとかそういうことではないけれど、自分の町のことを誇らしげに語る事ができるようになったんです。だからほら、町民の顔つきも少しがうでしょう？」

開催地としてできること

身近なことから実行してい

く。それがいま、洞爺湖町全体で取り組んでいる環境活動だ。

「駅前の花壇、見ましたか。最近暖かくなってきたから、行政と町民が共同で運営している『花と緑の委員会』の人たちで、花を植えて育ててくれているんです。ちょうどサミットの開催時に訪れた方に、一番きれいなものを見せたくって」

小さなことから続けていく。そのうちのひとつが「町民の植樹祭」だ。「千人規模で開催するんですよ。いまの有珠山は茶色い地肌が見えてかわいそうでしょう。苗木を植えて、それが何年かたって茶色い地肌を覆い尽くす。ここに一緒にくらししているんだから、緑の回復もしていかないとね」

サミット後に残すもの

サミット終了後、町はどうなっていくのかと伺ったところ、長崎さんは一度閉じた目をゆつくりと開いた。

「やっぱりここは観光の町だから。まずは観光で訪れてもらって、その中でこの町の美しさや素晴らしさを体験して

ほしいです。温かいけれど少し不器用な人たちや、その人たちと共存する自然など、訪れた人に何かを感じてほしいです。美味しいものを食べて英気を養って。そしてまた訪れてほしい」

窓の外を見ると、夕暮れの港へ船が帰って来た。こなの？』と聞かれたら胸を張って『洞爺湖町です』って答えられて、相手の方も『ああ、あの美しいところだね』って言っていただけのような、そういう町にしていきたいです」



火山のふもとにありながらも美しい自然がたくさん残っている。今も自然と人が共に暮らす場所だ。

「サミットをきっかけに諸外国との交流もしていきたいですね。最初は小さな町で、町に住む子どもたち、小・中学生から始めたい。それもやっぱり心の交流を通して大きくしていきたいと思っています。たとえば、子どもたちが大きくなったとき『ふるさととはど

ている。北海道洞爺湖サミットまであと少し。

まずはサミットが無事に終了することを願いつつ、その後も、洞爺湖町の人たちにつまでも、笑顔が残るように、洞爺湖町はがんばっている最中だ。

解説コーナー

ところでサミットってなに？

主要国首脳会議のことをグループ・オブ・エイト(G8)と呼び、山の頂上という意味でサミットとも呼ばれています。参加国はフランス、ドイツ、イタリア、日本、イギリス、アメリカ、カナダ、ロシアの八カ国。今年で三四回目になるサミットの開催地は北海道の洞爺湖に決まっている。今回のメインテーマはズバリ地球温暖化問題。

